
疑心暗鬼

全力疾走

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疑心暗鬼

【Zコード】

Z6941B

【作者名】

全力疾走

【あらすじ】

好きだけど動けないやりたいけど恐ろしいだから…偽りを作り出したでも…いつしか嘘はそれを喰う

(前書き)

初めてのホラーです

人間つて恐いな…つて恐いなーっと感じてくれたなら光栄です。

「なあ……アイツ驚かせよ!」

「いや……辞めよ!」

今一人の男が一つの部屋でムカつく野郎をビビりさせようと暗策していた……

「だつて、長池のやつまた女振ったんだぜ?」

「……あんな可愛い子を! もつたいねえ——」

「だろ? 大丈夫……びびった所写メにして学校にバラ撒こうぜ?」

まあそれぐらいならいいか……

「分った……やれりつ、じゃあどうのやるの?」

「俺にいい考えがある…………お前、長池の帰り道知ってる?」

何考えてんだ? 「アイツ?」

「ああ、知ってるが?」

「あの帰り道に川があるだろ?
あのドブ臭い……」

「…………ああーハイハイ……日本で6番目に臭い奴だろ?しかも、ちつ
ちやい……」

「もううう、あの臭い川。……でも最近変な噂あんの知ってる?」

「聞いた事がないな……噂なんて……」

「あそこ、去年、水死体が出ただろ?女の?」

「…………みたいだな……確かに……8月だっけな?」

「そりそり……臭かつただろう?」

思い出すだけで吐き気がする…

橋の下にある柱のフジツボに引っかかり…発見が遅れた…

どれくらいそこにいた……いや、あつたのかは分からぬ、ただ3
日以上はあつたみたいだ

「あれ……、腐ってたんだもんな……あそこで」

夏だったし、川だったし、小さくて船も通れない場所だった。

だから…発見されたに至った直接の理由は“腐乱臭”だった…

あまりに臭くて息もしたくないぐらいだった
その臭いは最低でも3日は漂つた……

「それで、噂つてなんだよ?」

「その女……長池の元カノ、りじー……」

……知つてこる、
俺が好きだった人だ。

長池と付き合つているのも知つていたけど、それでも好きだった

アレはそんな彼女の臭いだった……

だから、覚えた吐き気も、臭覚の異常反応何かじやなくて……

「……オイ聞いてるか?」

「あ、ああ悪い……」

「だからな、用はせ、俺らが、その女の振りすんだよ。」

「は?」

「あの女はなんで死んだかはしきりねえが……廻池ことひづけやあ影にななつてるだろ?」

「そりゃそりゃ……」

「そこ」に漬け込め!」

「くらなんでも気が進まねえ……

「大丈夫何も出はしねえよ……」

「こや庄のとか……庄なこじやなくして……」

「安心しな、アソコは下に足場があるんだ、そこに隠れて一気にガツッて……」

「なんだ橋の下行った事あるんだ?」

「ああ、行つた行つた。」

スゲー根性だなコイツ……

「ま……変装グッズはハンズで良いだろ……じゃあ、決行日は明日ね

「お前!?! 明日つて発見された田じやねえかよ!…」

「スリルあんだけ! そっちの方が……?」

「マジかよ……本当に出そうだ……

「よくこんな時間にここ来るよなー」

「今の俺達が言えたセツツukaよ?」

「ここは橋の下、暗い暗い水の上。

「マジで不気味だな…」

蒸し暑さが嫌になる。

……………ズブとこうよつ、腐りかけの水の臭いが鼻を突く

そんな夜だ。

「オイ、来るぜ…ハイテオカメラセツツじとかよ……写メだけじゃあ、足りないから…」

「分かつたよ…」

ビデオをスタート

足音が近付いてくる…
長池だとさつき確認した。

ちょうど今、人はいない…

カツ、カツ、カツ、…

来た来た来た！…！

カツ、カ、カ、カ、ガ、ガツ、ガツ、

…

よし…真上に来た。

ガツ

…

え?止まつた?

「なんで死んじまつたんだよ……あんなに好きだったのこよ……」

え?……?

「後3日でお前の命日か……いや、発見された日か……早いもん
だな……」

……長池なのか……?

「その時はお前が好きだった、サボテンを持つてくるからな……」

長池もマジだったのかよ……

「じやあな……」

長池が立ち去る

「オイ……良いくのかよ?行つしまひせせ?」

「馬鹿!…あんな奴齋かせるかよ!…」

「何言ひてんだよ、去年はひきさんとおひかしただろ~。」

「……………は?」

去年つて……

まさか……

「な、何言つてんだよ~。去年はいんな所来てねえよーーー!」

「お前こ何言つてんだよ?
お前から言い出したんだろう?
話したいって……?」

「えつ?」

嫌な風が流れゐる……

俺はここのを知つてゐる?~?

「わつだよ、ここで待ち伏せておひかしだらう~。あの子をやへ。」

あつ……

「ああ、そうか……お前は恐くなつて逃げ出したな……俺一人でおどかしたんだ」

ヌルリと首が舐められる感覚……

身体が凍る

「お前……まさか」

「あれ、脅かしただけだったんだけどな……スッゲー悲鳴でさ……パニックって下に落ちてさ、…………死んじゃつたんだよ。」

あの時感じた、吐き気は、罪の意識から……なのか??

「まあ、顔はキレイなままだからね……ずーーっとキスしたんだ、だつて前からしたかったし……」

殺人者っていうのはいつも画面の外にいるもをだと信じた……

それが……今……目の前に……いる。

「怖がんなよ……大丈夫、殺したんじやない……俺の物にしたかったんだ、だから隠そうとして……アソコにひっかけたんだけど……腐つちやつてわ……バレちゃった」

「お前、嘘、だよな……俺の事ビビらさせよつとしてんだろ?」

「本当だよ……ただ俺は彼女を好きだつただけや!」

その瞬間、身体の全力を振り絞つてこの糞野郎をぶん殴つた。

そいつの顔に当たつて

……………
歪… んだ?

え???

視界が歪む、これは水??

暗い…川か…!?

落ちたのか?いや、落とされたのか!!

アイツ…殺してやる!…!

「

ブハッ！…」

水の上、あいつは……いねえ……

クソツクソオーネオ

アイツが犯人だったのかよ……

アイツがツ！…！…！

「アイツが言つた事全部あのカメラが撮つたよな……」

走つて家に駆け込む…びしょ濡れのままビデオを再生する
いつもの部屋で…

そこには女装した俺が映つてた

「なんだ……コレ……」

ただ一人、喋つてゐる…………水面の自分に向かつて……

右手には鉄パイプ？

「なんだ、コレ、オイ、なんなんだよーー！」

「よつ、お帰り……」

「あ、お前……」

「ようやく気が付いた？俺はお前が作り出したんだよ、つまりお前なんだよ…………」

「あ、んな、じゃあ……あの子を殺したのは……」

「そうお前だ……」

「だけどな……おまえはいい人なんだよ、あの子が欲しくて欲しくて求めて、求めて……俺まで作り出した……だけど、ドタンバで逃げ出したんだ……恐くなつてわ……」

「だけど、俺はそんなの許さなかつた……俺を消す事にもなりかねえからよ……だから、のつとつたんだよお前を……そして俺はあの子を求めた……」

アイツが黙つた……

「ただな……ただ一つ俺も計算出来ない事が起きた……惚れちまつたんだよ……俺もあの子に……」

「えつ……？」

「だから、俺は考えた、ずっとコイツと一緒にいたい、ってな、だから……作り出したんだ……あの子を……お前の頭の中に……」

「ま……さか……」

いるのか俺の中に……

「せうせ、西るんだよ……お前の中によーーーだけど、ここからがいけねえ……お前はあの子が死んだ時に長池と別れたから死んだ、って思いここんじまつた……そうなるとせっかく作り上げたのにこの子はずーーーっと長池の事を思いつづけてんだよ……わかるか！？この気持がよーーーだから俺は長池を殺すつもりでいたんだ……だから……鉄パイプを持つてたんだよ……だけどな……ハハハありがたい事にお前は思い出した、長池の言葉を聞いた時に……この子にたいする独占欲をよーーー！」

まあ……顔とかは……お前が水死体の事ばつか考えるから、腐つてこんなになつちまつたがな……

ゆつべつと……アイツの顔が変わる……女から……物へ……物から……化物へ。

「あつ、いや……だ、こんな、」

「 オイオイ喜べよ、顔はこんなんだが、お前が求めてた彼女だぜ……ほら、ちゃんと俺とお前を愛してくれてる……」

彼女が出てきた

化物だ……彼女なのか……？

「あ、あーいイジてえー……る」

喋るたびに顔の穴から水がこぼれる。

ガンツ

鏡をおもついつきり殴りつけた……。

八一八一八一

もう、あいつらはいない……消してやつた

頭が冷めて来て……よつやく……分かつた……

あの時、橋の上で吐き気を感じた理由……

彼女は長池を愛したんだ……

それで、悔しさや、切なさが混じって吐き気がしたんだ……

そうか……そういう事かよ

手から血が流れる……

ダメだよ……彼女は俺の中になんか住んじゃいけない……

場違いだよ……

自嘲氣味に笑えた

そして、気づいた……彼女の発見された日は今日じゃない……3日後だ
……だけど俺は今日が発見された日だと思つてた

これは勘違いなんかじゃなくて

俺が最後に彼女に会つた日なんだ……と

そして俺は真っ暗な鏡に呟く。

「俺、自首するな」

鏡が答える血を動かして……

文字を作る

「それでもわたしはあなたをあいしてる」

鏡の中に腐った女が笑っていた

時は流れて ……

一年後、日本で6番目に臭くて、小さな川で水死体があがつた
ソイツは身体のアチコチに

『アナタが欲しい』

とエグツて彫つてあり、満足そつた顔をして死んでいた。

(後書き)

すみません、綺麗なホラーにしたかったんですが結構汚い物になってしましました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941b/>

疑心暗鬼

2010年11月16日18時46分発行